

二〇一二年三月十一日 仙台

酒井恵三

東日本大震災一周年に当たる日を、被災地の最大都市である仙台で過ごすというのはどう言うことなのか。はっきり言ってそれを経験した私も、一言で言うのは大変難しい。三・一一はまだ余りにも記憶に生々しく、八月六日の原爆投下の日を広島で過ごすのとはまた異質なものである。ただどちらも犠牲者を想い、町中が祈りに包まれるような雰囲気になるのは共通しているとも言える。原爆投下も大震災も人類史上の大きなエポックであり、我々日本人は殊に背を向けることが出来ないの言うまでもない、勿論事の内容は比較することの出来ないほど、次元の違うものであり、同列に論ずるのは本当はおかしいのかも知れないが。

二〇一二年三月十一日、仙台の町は寒い中にも、晴れて気持ちの良い朝を迎えた。宿泊していたユースホテルの部屋にもおだやかな日の光が差し込み、私はゆったりと目覚めたものだった。朝食を取っている時見ていたテレビの番組編成は通常の日曜日のそれとは大きく異なっており、今日が大震災一周年であることを否が応にも思い知らせてくれたのだった。

ユースホテルを出てから路線バスに乗る前に近くのコンビニで地元紙「河北新報」を買った。地元の事を色々知るには地元の新聞を読むのがまず一番であると普段から考えている為、他県へ旅行した時は出来るだけ買うようにはしているが、大震災一周年のこの日を仙台市内で過ごした際も、実に参考となる情報が多かったものだった。

路線バスで一度仙台駅前に出た。仙台市内は普段の日曜日とはまた違った異様な活気に満ちており、バスに乗っている間も少し驚いていた。銀行など金融機関の玄関には弔旗が掲げられていたりして、厳粛な雰囲気を醸し出していたし、ビルの壁面が震災で壊れ、それを修復する為の足場が組まれている所が何箇所かあるのを見たのも印象的であった。仙台周辺は過去平均大体三十数年おきに大震災が発生し、

実際ここ数年は「宮城沖地震」が来ることは確実視されていた訳だが、本当に地震が起こったら、想像をはるかに凌ぐ規模であった為、こうして壊れた所も多かったらしかった。

仙台駅前でバスを乗り換えて犠牲者慰霊祭の開催される「仙台国際センター」へと向かった。バスを下車して国際センターの真向かいにある「仙台市博物館」へと入った。慰霊祭にはまだまだ時間があつた。ここで時間を潰し、昼食を取った方が賢明だと考えたからである。実際博物館の一階ギャラリーでは「資料レスキュー展」なる歴史資料の修復に関する展示会が小規模ながら開かれており、興味深かった。

他にも「仙台平野の歴史地震と津波——土と文字が語る仙台平野の災害の記憶——」と言った小規模展示会が開催されており、こちらも興味深く観覧した。事実仙台平野では過去にも幾度か大地震、津波が発生していたことが近年の自然科学の調査や遺跡発掘調査、あるいは人々が残した記録から分かって来ており、この地が恐らく世界的にも稀な地震頻発地帯であることを改めて思い知つたものだった。

真向かいにある「仙台国際センター」に入り、犠牲者慰霊式に参加した。犠牲者の慰霊式ではまず、仙台フィルハーモニーの弦楽四重奏でモーツァルトやヘンデル、そして日本の童謡「故郷（ふるさと）」が披露される。次に政府主催の「東日本大震災一周年追悼式」（NHK）がテレビ放映され、仙台の女性市長である奥山恵美子氏から式辞が述べられる。

それから市議会議長、そして母、妻、長男と家族三人を亡くした若林区荒浜の内会副会長だった（荒浜は仙台市内でも津波被害が甚大な所だった）。鈴木均氏から遺族代表の言葉があり、市内の公立高校の生徒二名から復興への誓いが語られた。実は私自身、津波の被害者の方から生でその体験談を聞くのは初めてであり、真剣に聞いたものだった。鈴木氏は町内会副会長と言う立場上、自分の家族よりも町内の人々の非難を優先させ奔走し、結果三人を津波の濁流の中に吞ませてしまったことを未だに悔やんでいると語り、実に生々しい印象を私に与えたものだった。彼の口調は穏やかであったが、次第に熱を帯びたものへと変わり、時には激しい自責の念が私の胸を打つたのだった。これほどまでに激しく、また、感動的な式辞と言うものを、私は聞いたことがなかった。

最後に仙台市内の三公立中学校合同で「BELIEVE」「あすという日が」の二曲が合唱され、献花となった。私は祭壇に花を捧げながら、今日わざわざ仙台まで来

て慰霊式に出席して本当に良かったと思っていた。

帰りのバスの中から仙台の中心市街地の様子を眺めていた。私は、復興バブルに沸くこの町の異常なまでの活気に再び目を見張っていた。使用不能になったホールやビル等も多少はあるものの、少なくとも表面的には大震災以前よりも遥かに活況を呈している。

三・一一以降この都会は以前よりも数多くの学会会議や国際会議が開催されたり、鹿島や大林組、大成建設や清水建設等大手ゼネコンの人々が工事関係で流入して来たりと外部の力でかなりの部分、表面的な復興と繁栄を享受しているのだ。しかし本当の仙台、そして被災三県の復興は恐らくは、阪神大震災の際の神戸、兵庫県とは比較にならぬ程の時間と手間を必要とするだろうし、それは忍耐強い東北人の気質や県民性に最終的には期待するしかないのだろう。かつて手塚治虫は「鉄腕アトム」の中で二〇一〇年代を原子力を初めとして科学技術の高度に発達した素晴らしい時代として描いた。だが現実の二〇一〇年代の日本では、地震と津波と言う自然災害の前に、人類の科学技術の粋を集めて建設された原子力発電所はあえなく破壊され、爆発したのだった。これを皮肉と言わずして何と言えばよいのだろうか。地下の手塚氏は三・一一と福島原発の重大事故をどう思っているのだろうか。そんなことに思いを巡らせながら私はバス車内から仙台市内の雑踏を眺めていた。

参考資料

「河北新報」

二〇一二年三月十日〜十二日分

二〇一一年三月、四月分縮刷版